

生き物豊かな福島潟自然学習園の創造と潟の環境保全・普及活動

ねっとわーく福島潟 副会長(事務局担当) 松木 保

はじめに

福島潟は、新潟県豊栄市の南東部に位置する潟湖で、国の天然記念物オオヒシクイなど220種の野鳥や、自生の北限であるオニバスなど350種の水生・湿生植物が確認される自然の宝庫である。しかし、近年は干拓により面積の小さくなった潟に流入する土砂の堆積により陸地化が進み、さらに家庭排水などによる水質の悪化や河川改修工事による水位変動の増大などにより、貴重な生き物が減少しつつある。

豊栄市では、福島潟とその周辺の失われかけている自然環境を保全・復元し、後世へ継承していくため、平成4年度より「福島潟自然生態園整備事業」を推進し、平成10年度その最後の仕上げとも言える「自然学習園」に3つの池を造成し、この整備事業のハード面は完成した。一方「ねっとわーく福島潟」は多くの人々が自然とふれあい、福島潟の自然を守り理解を深めてもらえるような活動を市民とともに行なっていくことを目的に平成9年5月に設立し、専門部会「豊かな自然学習園をつくる会」(以下「つくる会」という)を同年10月より発足し、平成10年度から12年度の環境事業団の地球環境基金の助成を受け「自然学習園」内の3つの池の維持管理や市民の手による手作り池の造成、潟とその周辺の生物・水質調査、オオヒシクイの食草であるマコモの潟への植栽等、以下に述べる諸活動を行なって、ソフト面で行政の補完をするとともに、生きもの豊かな福島潟自然学習園の創造と潟の環境保全・再生に努め、市民からも大きな評価を受け期待を寄せられてきた。また、これらの活動をとおしながら、観察会の開催や出前授業等の普及活動にも力を入れてきた。この度の日本水大賞への応募は、これまで本会が設立以来5年間に行なってきたさまざまな活動の基本方針や成果を述べるとともに、活動にあたって大切にしてきたなどを挙げたものである。以下その概略を記す。

活動の目的

応募活動の目的は、次の2点である。

- (1) 豊栄市の「水の公園福島潟」に平成10年造成された「自然学習園」に多様な自然環境を有する水辺空間(池および水路)をつくり、多様な生きものが生息・生育でき、福島潟の再生にとって有用となる研究・増殖・観察・実験を行なう環境を整備・創造する。
- (2) (1)の活動を通しながら、潟の再生(マコモの植栽)や普及活動(観察会の開催、出前授業、学校ピクトブづくりへの協力、福島潟生きものカルタの制作等)を行い、潟の再生に対する住民の意識の高揚を図るとともに、一般市民や児童生徒に自然環境学習の場を提供する。

活動の概要

具体的な活動と参加人数等を以下に記す。

- (1) 「水の公園福島潟」内の自然学習園への動植物の導入・植栽、学習園の維持管理ならびに生きもの豊かな水辺環境(手作り池)の創造
(平成10年4月～現在随時、各月平均1回)
参加人数...延べ約500人。
- (2) 自然学習園での市民向け観察会の開催
(平成10年4月～現在年3回、現在まで12回)
参加人数...延べ約200人。
- (3) 豊栄市全域の自然度調査
(平成10年6～ヘイケボタル、11・12年度はタンボポ、トノサマガエル、メダカの分布調査)
参加人数...延べ約200人。
- (4) 自然環境(魚類、植物、水質)の調査研究
(平成9年～現在まで年3～4回)
参加人数...延べ約120人。
- (5) 潟先案内人養成講座の開催
(平成10年度7回、13～14年度7回予定)
参加人数...延べ約150人。

生き物豊かな福島潟自然学習園の創造と潟の環境保全・普及活動

ねっとわーく福島潟 副会長(事務局担当) 松木 保

(6) 講演会と交流集会の開催

(平成9年～13年度まで年1回)…広く会員外にも呼び掛け行った。12年度は「新潟県学校ピオトープ2000」を開催(新潟県学校ピオトープ連絡協議会と共催)

参加人数…延べ約350人。

(7) オオヒシクイの食草マコモの植栽事業…市民に呼び掛け行った。

(平成11～13年まで年1～5回、ただし、市民参加は年1回)

参加人数…延べ約200人。

(8) 小学校への出前授業(ゲストティチャーとして各学校へ)…市内の小学校の要望に従い、福島潟に関する授業を延べ30回以上実施した。

(平成11年～現在随時)

参加会員人数…延べ約40人。

(9) 学校のピオトープづくりへの協力

(平成11年～現在、太田小、葛塚小、沼垂小、豊栄高校)

参加会員人数…延べ約50人。

(10) オオヒシクイ繁殖地(カムチャツカ)調査

(平成11年6月)ならびに福島潟における越冬行動調査(平成10年～現在、毎年10～2月の5ヵ月)越冬行動調査参加人数…延べ約80人。

繁殖地調査は、豊栄市との協力事業で会員1名が参加した。

(11) 「福島潟生きもののカルター植物編」の制作と各小学校への配布(平成12年度)

参加人数…延べ約200人。

(12) ビデオ「オオヒシクイを待つ人々」の制作と各小学校への配布(平成12年度)

参加人数…延べ約200人。

(13) 会報(会設立から現在まで17号)と活動報告集(平成10～12年度まで3号)の発行



写真1 自然学習園のオープニング行事の植栽



写真2 潟の保全活動—マコモの植栽



写真3 普及活動 - 生き物カルタを使った出前授業

自然学習園の創造と環境保全活動の基本方針

活動にあたっては、次のような基本的な考え方で臨んだ。

- (1) 出来るだけ多様な自然環境を有する水辺空間(池)をつくり、潟の再生にとって有用となる研究・増殖・観察・実験を行う環境を整備する。
- (2) 市民や児童生徒が、水に親しんだり、自然環境の学習をする場を提供する。
- (3) 動植物の種の導入にあたっては、次の諸点に留意して行った。

潟に昔から生育生息していなかった種の導入はしない。

潟に現在も生育生息しており、だれにでもわかりやすい身近な生き物はできるだけ多く入れる。

過去に普通に生息していたが、現在はほとんど生息していない種の導入・保存もしていく。

特定の種のみを増殖を想定した水域の造成は行わない。ただし遷移の過程でトンボやホタルもたくさん飛び交うような環境をつくることは夢である。

- (4) 池の維持管理に農薬や除草剤は使わない

活動の成果

- (1) 自然学習園の池に貴重な動植物を導入し、再生・保存していくことが可能になった。たとえば絶滅危惧種のヒシモドキをはじめとして、アサザ、ガガブタ、ヒツジグサ等の浮葉植物やデンジソウ、ナガバノウナギツカミ、ヤナギトラノオ、タコノアシ等の湿生植物、さらにミズオオバコやオオトリゲモ等の沈水植物等が今までの活動の中で定着した。
- (2) 市民による手作り池の造成、マコモの植栽、自然学習園での観察会の開催等とおし、潟の再生に対する意識の高揚を図ることができた。
- (3) 地元高校の理科部の活動や小学校の総合的な学

習活動に生かすことができた。さらに小学校3校、地元豊栄高校の「学校ビオトープづくり」に発展し、本会として全面的に協力することができ活動の輪が一層広がった。

- (4) 「生きものカルタ植物編」は、小学生とともに制作し、地元全小学校に配布・活用している。総合的な学習の時間にも取り入れられ、環境教育に役立っている。またビデオ「オオヒシクイを待つ人々」も地元各小学校で活用されている。
- (5) 学習園での今までの活動実績をふまえ、行政からも大きな評価を受け、維持管理を全面的に委託され期待を寄せられてきた。

活動にあたって大切にしていること

- (1) まず実践！を合い言葉に

まず潟を自分の目で見て、それから考え、活動しようとの合い言葉で、活動をしてきた。活動・実践の中から環境に対する意識は高まると思うからである。

- (2) 活動のための条件づくり(活動資金と人、行政との関わりなど)

a 活動資金は自前で稼ぐ

本会は発足してまだ日が浅いにもかかわらず、資金面で、平成10年度～12年度(2000)の地球環境基金を初め多くの助成金を自前で申請し助成を受け、活動の活発化につながった。

b ゆるやかな連携と活動の中核部隊

友好他団体との連携...雁わたる会、豊栄自然指導員の会、福島潟野鳥の会、学校ビオトープ連絡協議会等とそれぞれの会の独自性を尊重しながらネットワークづくりを行い、いろいろな市民グループと手を携えて活動を行なっている。図1のようなでんでん太鼓方式と呼ぶ組織を目指している。

「ねっとわーく」内の専門グループ「豊かな自

生き物豊かな福島潟自然学習園の創造と潟の環境保全・普及活動

ねっとわーく福島潟 副会長(事務局担当) 松木 保

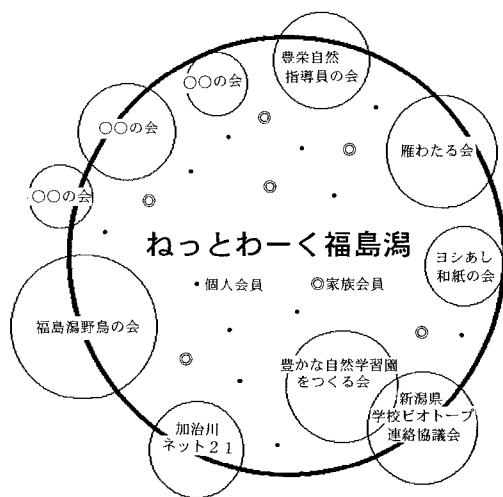


図1 私たちの目指す組織

然学習園をつくる会」の活動は、本活動の中核部隊としての役割を担ってきたと思われる。

「つくる会」のメンバーは、現在約25名いるが、メンバーは各自の専門を生かしながら活動に取り組んでいる。それぞれの専門は、生態学、植物分類学、化学、造園学、土木工学、昆虫学、陸水生物学等多岐にわたっている。また職業も、農業、建築業、教員、主婦等さまざまである。少なくとも月1回以上は会合を持ち、みんなで話し合いながら活動を進めてきた。全会員は、現在340人いるが、活動を推進していくには中心となる核が必要である。

会員増は来訪者サービスから

会発足時220名だった会員は、5年間経過し340名を突破している。これは福島潟への来訪者のサービスを通して可能となったと考える。

c 行政との関わりは対等なパートナーをめざして

行政と連絡を密にしながら活動を進めてきた。私たちの会合には、必要に応じて行政からも加わってもらった。行政(豊栄市文化振興課、ビュー福島潟)とは、対等なパートナーとして、今後も活動を進めていきたい。

活動実践の中から豊栄市よりの委託業務として自然学習園の池の維持管理が任されたのは、私たちの活動にとって大きな励みとなった。そして定期的に行なわれる行政との連絡協議会は、パートナーシップの確立の上で重要な役割を果たしていると考えられる。

(3) 活動する市民に「楽しさ」と「生きがい」を

活動を継続していくためには、何といたっても「楽しさ」と「生きがい」が欠かせないことである。それには、無理をせず、あせらずを心がけている。

(4) 普及活動は子供たちから

会員の多くのメンバーが地域の小学校へ出向いて子供たちに授業をするいわゆる「出前授業」を行なってきた。学校側から言うとゲストティチャーとなって、子供たち一緒に地域の自然に触れるよう心がけてきた。また、「生きものカルター植物編」ビデオ「オオヒシクイを待つ人々」の配布も市内小学校全部に配布し総合的な学習の時間に活用してもらっている。

(5) より確かな情報の収集と発信

会報の定期的な発行は、会の発展にとって絶対に必要である。またインターネットの活用、市民向け普及活動(各種観察会、潟先案内人養成講座、学校ビオトープづくりへの協力等)等を通してより確かな情報の収集と発信を今後も続けていきたい。

活動の今後の計画

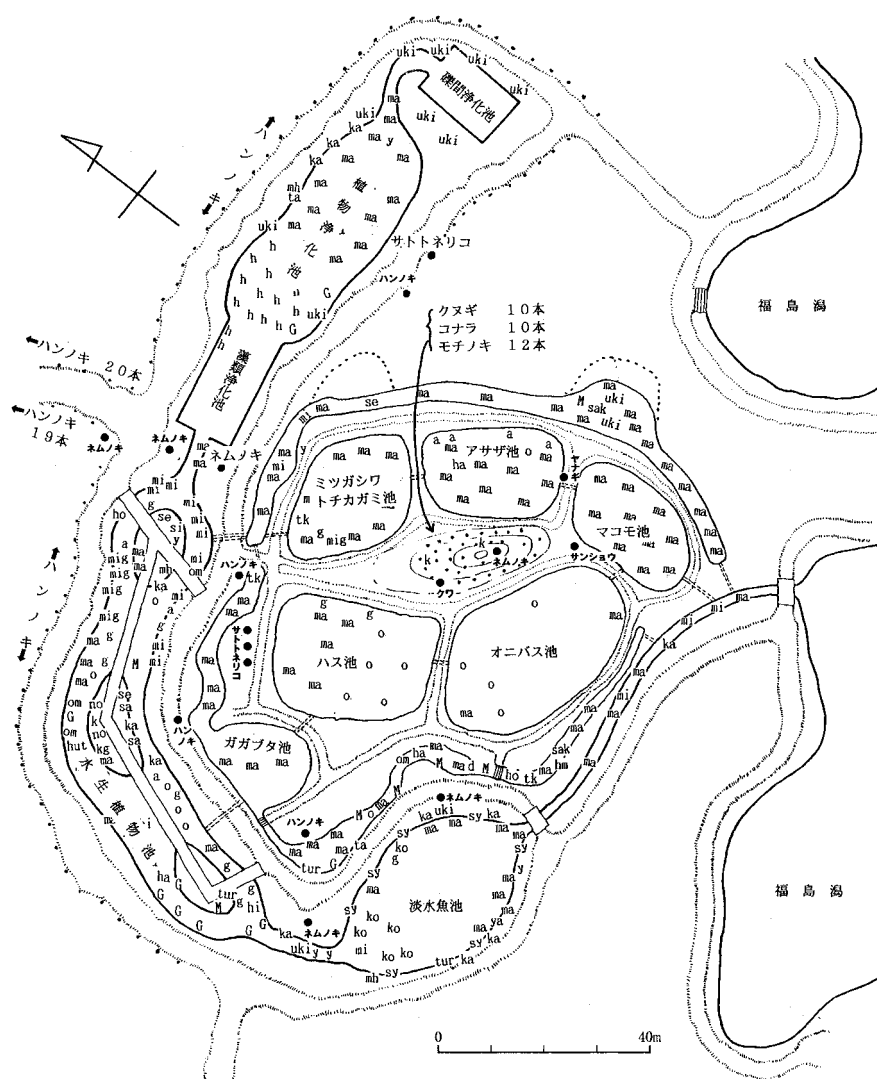
前記自然度調査と「繁殖地調査」、「カルター植物編」以外は今後も継続して活動をしていく予定である。特に潟先案内人の養成講座では、仮称「福島潟学」を作成し、潟先案内人のテキストとして活用したいと考えている。また、「福島潟生きものカルタ」は水生動物編(魚類、貝類、水生昆虫)の制作に取り組みたい。

おわりに

今回日本水大賞に応募して、このような賞をいただき感謝している。同時に今後の活動に対する責任の重さも痛感している次第である。私たちの活動は福島潟という地域の活動ではあるが、「思考はグロ

ーバルに行動はローカルに」をモットーに、地球的な水環境の保全・改善を目指して今後とも活動をしていきたいと考えている。

なお、私たちの活動の中心となっている自然学習園の2001年8月の植物マップは、図2に示した。



a:アサザ d:ゲンジソウ G:ガマ g:ガガブタ h:ヒメガマ ha:ハス hg:セツジグサ hi:ヒシ hm:ヒシモドキ ho:ヘラオモダカ hut:フタイ k:カンゾウ ka:カササゲ
kg:コバギボウシ ko:コウホネ M:ミズアオイ ma:マコモ mh:ミノハギ mi:ミクリ mig:ミツガシワ no:ノハナショウブ o:オニバス om:オモダカ sa:サワオグルマ
sak:サンカタイ san:サンショウモ se:セリ se:シロネ sy:ショウブ ta:タコノアシ tk:トチカガミ tur:ツルアブラガヤ uki:ウキヤガラ y:ヨシ ya:ヤナギトラノオ
●樹木

図2 自然学習園 池の植物マップ